

『続羊の歌』『死別』について（後半）

福井 優*

I. 概要

本章の「死別」と次章の「審議未了」とは対を成しており、共に 1960 年の加藤周一（1919～2008 年）の経験が描かれる。次章が 1960 年 5～6 月に盛り上りの頂点を迎えた安保闘争と加藤との関わりが示されるのに対し、本章はそのような政治的激動の最中における「ひとりの友人」＝原田義人（1918～60 年）との「死別」が綴られる。

加藤にとって、20 年来の親しい友人であった原田の早逝は衝撃的な出来事であった。本章では、加藤が原田の死を通じて、自身の来し方行く末を見つめ直し、そして、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学という新天地へと飛び立つまでが描かれる。

本章では、主に以下のような話題が展開する。加藤は、体調不良を抱えているにもかかわらず、頑なに病院で診察を受けようとししない原田を説得し入院させたのだが、原田はまもなくこの世を去る。加藤は原田の死後、「私は彼をほんとうに識っていたのだろうか」という疑問を抱くようになり、その思いはいよいよ強くなっていく。そして、しばらくして原田が「みずから死を望んでいたのではなかったか」という考えに至り、「彼の大きな部分は、私の理解の外にあると思った」という。しかし、加藤は原田と自身のこれまでの軌跡を重ね合わせながら、人生の大きな転機を予感しつつ、同じような立場であったはずの原田がその矢先にいなくなったことに深い悲しみと痛恨を覚える。

さらに加藤は過去に原田が、妻子がありながら欧州で出会ったひとりの女性を深く愛するようになり、そして、その女性との愛を断念したのではないかと「空想」する。その一方で、加藤は病院に原田を訪ねた後に遭遇した「安保反対」の看板を担ぐ学生たちの隊伍に、奇妙にも戦時下の「学徒出陣」の光景を想起してしまう。また、その隊伍の列にも加われず、学生たちの犠牲を防ぐこともできない自分自身に対し、癌に対してと同じような「惨めな無力感」に苛まれ、「傍観者として育った私は、遂に傍観者として終るほかないのか」という思いを抱く。そうして、原田の死が「私のなかで何ものかを変えていた」という加藤は、東京を離れることを決意するのである。

II. 解説

第 8～10 段落

私の女友だちの一人は、彼がおかしい、大変奇妙な人間だ、といったことがある。彼女はそれ以上をいわなかったし、その後も彼女から彼の話を聞いたことはない。しかしどういふきっかけであったか、私が彼のまえで彼女の名を口にしたことはある。それは日本橋の喫茶店の午後で、私たちの周りでは、男女の勤人がそれぞれ話しこんだり、笑いさざめいたりしていた。私は欧州から帰ってきたばかりで、彼もまた帰国後まもなくの頃であつたろう。話すことは多かつた。その話は当然欧州にも及び、彼が欧州で彼女に

* 立命館大学衣笠総合研究機構間文化現象学研究センター客員協力研究員。

会っていたことを思い出して、おそらく私は、彼女の消息を話題にしたのであろう。彼の反応は、私をおどろかせた。「その話はよそう……」と彼は、それまで私の聞いたこともないほど激しく、ほとんど怒鳴りつけるようにいった。それ以後、私は彼女について彼と話したことがない……しかし私の裡には、次第に空想が育っていった。その空想は、次のようなものであった。

彼は欧洲で彼女に会い、夢中になった（一度惚れこんだことがなければ、女の名まえを聞いただけで、男が俄かに激するということはないだろう）。しかし東京に残して来た家族を捨てるつもりはなかった（何故そのつもりがなかったかは、私にはわからない。しかしおそらく彼の強い「責任感」が、主な動機ではなかったろうか）。そこで窮余の一策を（窮した末でなければ、男が「大変奇妙」になることは、少いであろう）、彼は案じたにちがいない。彼自身は、東京の家族の面倒をみる。彼女はひとりで暮す。相愛の男女は、共に暮すことをみずからあきらめ、その苦しさには堪えることによって、かえって強く心を通わし、次第に精神的な絆を強めながら遂に無上の友情に到るであろう。その友情は、お互いの仕事をたすけ、お互いの人間を豊かにするにちがいない……彼はそういうことを夢みて、その夢を実現することができなかったのであろう。

私の空想は見当ちがいであったかもしれない。しかし私は彼の死後、彼が一度は激しく愛したことがあり、その愛が彼を苦しめ、彼に夢をつむがせ、その夢と実際とのくいちがいが彼を深く傷つけていたということを、ほとんど信じるようになった。彼はその短い生涯を、ぬるま湯のなかで過していたのではない。精いっぱい、彼なりのし方で、生きぬいていたにちがいない。（202～204 頁、改 230～232 頁）

(1) 「私は欧洲から帰ってきたばかりで、彼もまた帰国後まもなくの頃であったろう。」

→加藤の欧洲からの帰国は 1955 年 3 月で、原田は 1956 年 1 月。第 8 段落の「私の女友だちの一人」である「彼女」をめぐる加藤と原田の会話は 1956 年頃か

(2) 加藤が、原田と「彼女」との関係についての「空想」を逞しくできたのは、加藤自身の実体験を重ね合わせたからだろう

→『続羊の歌』（「冬の旅」～「外からみた日本」）では、加藤が留学中にフィレンツェで出会った「娘」＝ヒルダ・シュタインメッツと次第に愛を深めていく様子が描かれる。加藤は時にヒルダと別れることを考えつつも、ついに「京都で私の帰りを待っている女」（150 頁、改 171 頁）との別れを決意し帰国する。「私はながく彼女を愛していると思っていたが、ひとりの女にほんとうに夢中になったときに、彼女と私との間の関係がそれとはちがうものであったということに気がついたのである」（168 頁、改 191 頁）

→実際の加藤は、中西綾子と結婚していたにもかかわらず、フランス留学中の 1952 年にヒルダと出会い恋に落ちる。1955 年のヒルダの来日をきっかけに綾子とは別居し、ヒルダと世田谷区上野毛で同居するようになった。1962 年 1 月に綾子との協議離婚がようやく成立し、同年 3 月にヒルダと正式に結婚する¹

→原田と加藤は、留学をきっかけに欧洲で愛した女性と東京の家族とのあいだで同じ境遇に置かれた。これも加藤が原田に「同じ道を歩んできた」（202 頁、改 227 頁）と感じ、共感を覚えた理由であったにちがいない

¹ 鷲巣力「略年譜」『増補改訂 加藤周一を読む——「理」の人にして「情」の人』（平凡社ライブラリー、2023 年）443 頁。同『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』（岩波書店、2018 年）493 頁。

→しかし、2 人のこの問題についての解決策は対照的だった。原田は「彼自身は、東京の家族の面倒をみる。彼女はひとりで暮す」という選択をしたのに対し、加藤は異なる途を選ぶ。結果的に一緒になることを諦めることで、逆に「無上の友情に到」ろうとした原田の「夢」は潰える

(3) 管見の限り、原田の友人たちの原田に関わる追悼文や回想記で、上記の問題に触れた文章はない。

ただし、福永武彦の「告別」(1962 年 1 月)はこの問題を描いた小説であり、本章との共通点も多い
→「そこで私は、ひょっとしたら彼〔原田をモデルとする主人公の上條慎吾〕はいつからか生きようという

気力をなくしてしまったのではないかと、思い当った。いつからだろうか、そしてなぜだろうか」。
「昔の——いつのことだったか、彼の洩らした言葉がふと私の記憶の中に浮び上って来るのだ。「結局僕たちはいつでもお座なりのことを言って、自分たちの秘密を心の奥底に隠しているのさ。そういうふうにして生きているのだ。」²

→上條は留学先の欧洲でジャーナリストのマチルダと出会い愛し合うようになるのだが、最終的に家族の方を選ぶ。その後、マチルダは東京の上條の自宅を突然訪問し、そこで上條やその妻・娘と対面する。この経験は上條の人生に暗い影を落とす

第 11 段落

病院に彼を訪ねた後で、私は何かの用事のために本郷へ行ったことがある。死の観念は、私を圧倒していた。私は惨めな無力感に捉われ、周囲のもの事に興味を失い、ただ機械的に、人通りの少い本郷通りを歩いていた。そうして大学の正門のまえまで来たとき、突然「安保反対」の看板をかついで正門のなかから出て来る学生たちに出会った。学生たちは、ゆるく隊伍を組み、黙々として正門を出ると、三丁目の方へ歩いていった。そこから彼らがどこへ行くかを私は知っていた。その彼らの姿は奇妙にも、戦争の末期に銃を担ぎながら、正門を出て行った「学徒出陣」の光景を、思い出させた。故郷からも、恋人からも、家族からも、遠く離れた海や密林で死んでいった青年たち……私は正門を出て来る学生たちを見つめながら、どうしてもその場を立去ることができなかった。彼らのなかの何人かは——誰が知ろう——岸政府の警察に殺されて、再びかえらないかもしれない。しかし私は彼らの隊伍に加わることもできず、彼らの犠牲を防ぐこともできない。何という無力、何という惨めさであろうか。私はただ小さな声で喋るにすぎない。それに癌に対して無力であるのと同じように、嘗ては学生を戦場に送り、今は学生をなぐりつける権力に対しても、全く無力でしかないだろう……傍観者として育った私は、遂に傍観者として終るほかないのか、と私は、そのとき、暗澹たる心の底で感じていた。(204～205 頁、改 232～233 頁)

(1) 原田の入院は 1960 年 6 月 19 日であり³、亡くなったのは同年 8 月 1 日⁴。ゆえに、加藤が「病院に彼を訪ねた後で、私は何かの用事のために本郷〔=東京大学〕へ行」き、「「安保反対」の看板をかついで正門のなかから出て来る学生たちに出会った」のは、この期間といえる

→この時期の 60 年安保闘争の状況⁵

² 福永武彦『告別』（講談社文芸文庫、1990 年）45、13 頁。

³ 「とびっくコーナー 原田義人氏 誰からも親しまれ、慕われた人」（『図書新聞』1960 年 8 月 13 日号）。

⁴ 「原田義人氏」（『毎日新聞』1960 年 8 月 1 日付夕刊）7 面。

⁵ 以下の年譜は、主に中村政則＋森武麿編『年表 昭和・平成史 1926-2011』（岩波ブックレット、2015 年）40 頁を参照した。

- 5. 19 政府・自民党、衆院で質疑打ち切りを強行、警官隊導入。5. 20 未明、新安保条約を自民党単独で強行採決（以後国会空白状態）
- 6. 15 安保改定阻止第 2 次実力行使に全国で 580 万人参加（～6. 16）。国会構内で全学連主流派＝共産主義者同盟（ブント。メンバーは東京大学や早稲田大学の学生が多かった。1959 年 6 月の第 14 回全学連大会で中央執行委員会を掌握）⁶、警官隊と衝突【図】、東大生でブントメンバーの樺美智子死亡。国会前デモで藤田省三は機動隊に襲われ全身に 10 ヶ所の打撲傷を負い、同じく吉本隆明は逮捕され二晩留置される
- 6. 18 安保阻止統一行動、33 万人が国会デモ（徹夜で国会を包囲）
- 6. 19 新安保条約、自然承認
- 6. 23 新安保条約批准書交換、発効。岸信介首相、閣議で退陣の意思を表明
- 7. 2 東京で「全都帰郷学生の集い」開催。「帰郷運動」が本格化⁷
- 7. 15 岸内閣総辞職。7. 19 池田勇人内閣成立
この頃、ブントは安保闘争の評価をめぐり分裂（戦旗派・プロレタリア通信派・革命の通達派）、事実上の解体⁸
- 11. 1 経済審議会、国民所得倍増計画を答申。12. 27 閣議、同計画を決定
- 11. 20 第 29 回総選挙（自民 296、社会 145、民社 17、共産 3）

→新安保条約が自然承認され、闘争の高揚が次第に退潮していく時期に、加藤は末期患者である原田のいる病院に通っていた

(2)「その彼らの姿は奇妙にも、戦争の末期に銃を担ぎながら、正門を出て行った「学徒出陣」の光景を、思い出させた」

→「嘗ては学生を戦場に送り、今は学生をなぐりつける権力」とあるように、1943 年の「学徒出陣」も、1960 年の安保反対運動に挺身し警官隊の暴力にさらされている学生たちも、国家権力の犠牲となっているという点では同じ。しかし、そうと分かりながら、「私は彼らの隊伍に加わることもできず、彼らの犠牲を防ぐこともできない。何という無力、何という惨めさであろうか。私はただ小さな声で喋るにすぎない」と加藤は綴る

→「審議未了」で加藤は、「反対意見を公表する以外に、何等の行動をとらなかった」（212 頁、改 241～242 頁）と述べている

→癌に対しても、そして権力に対しても、どうすることもできないという「惨めな無力感」に加藤は苛まれる

⁶ 猿谷弘江『六〇年安保闘争と知識人・学生・労働者——社会運動の歴史社会学』（新曜社、2021 年）172～173、184 頁。

⁷ 安藤丈将「「持ち返し」の思想のゆくえ——1960 年夏、帰郷運動という経験」（『早稲田政治経済学雑誌』361 巻、2005 年 10 月）。

⁸ 猿谷前掲『六〇年安保闘争と知識人・学生・労働者』202 頁。



【図】『一億人の昭和史 6 独立——自立への苦悩』（毎日新聞社、1976 年）222～223 頁より

- (3) 「突然「安保反対」の看板をかついで正門のなかから出て来る学生たちに出会った。」「私は正門を出て来る学生たちを見つめながら、どうしてもその場を立去ることができなかった。」

→ 「優等生」(『羊の歌』)

「そのときの教師は、権力そのものであり、一列の生徒たちは、罰を受ける理由が何であろうと、また私とのつき合いが浅かろうと深かろうと、権力に対して無力な仲間になりがなかった。その後、私は何度も、たとえば、一九六〇年に、本郷通りで「安保反対」の看板を掲げながら、大学の正門を出てくる学生たちの一隊に出会ったときに、小学校の門からパンを買うために駆け出した子供たちと、彼らを止めようとしていたと主張することで、教師と馴れ合った私自身に対する憎悪を、思い出したのである。」(正・64 頁)

→ 60 年安保闘争時のかかる学生たちの光景は、加藤にとって後ろめたさのような感情と強く結びついている

- (4) 「傍観者として育った私は、遂に傍観者として終るほかないのか」

→ 「傍観者」「観察者」「他処者」(＝「高みの見物」)は、加藤が自己と社会(自己が所属する社会であっても)との関係において、自覚的に選択した基本的な立場。これは『羊の歌』でもしばしば強調され、例えば「土の香り」では、父の田舎の実家を訪れた少年の加藤が、そこで開かれた農民たちの冠婚葬祭の「宴会」(共同体結束の中心的儀式)を外から眺め観察する様子が描かれる。「私は他処者であり、おそ

らくいつまでも、他処者として生きるだろう」。「私はその後、そういう宴会の多くにおいて、もはや強制された観察者ではなく、みずから択んだ観察者になった」(正・24～25 頁)

→加藤「高みの見物について」(1954 年)

「しかし高みの見物を免れる必要があるのか。あると私は思う。しかしそれは免れさえすればよい悪乃至誤といったものではなく、道具に使うて便利な知識をあたえる。時と場合によっては便利どころでなく死命を制する知識をあたえるものだと思う。なぜならある一つの社会の全体としてのうごきを客観的に判断するためには、その社会をはなれてみる必要があるからだ。客観的に、——つまり公平無私に、責任をとらずにということになる。[……] 一般化していえば、高みの見物は正確な判断をあたえるが、その判断は役にたたぬ。たまたま役にたたぬのではなく、役にたたぬことそのことが、判断の正確さの条件になっている。つまり事の本質上無益で正確な判断が高みの見物の結果だということになる。従ってもし私と社会との関係が、本来「解釈することが目的でなく、改造することが目的だ」という原則にたっているとすれば、高みの見物ではこまる。」⁹

→丸山眞男『加藤周一著作集』をめぐって——W 氏との対談(1980 年)

「加藤君は、白い手袋をしていて、手が汚れていないというか、もっと極端にいうと、傍観者としてみられる。だから、鷗外も含めて、傍観者というのは評判が悪いんです。その逆の、知行合一みたいなのが評判はいいんだなあ。いわゆる知行合一というのは、ぼくにいわせると「知」があまりないんだけどね(笑)。行というか、肉体的実践に従属している知のほうがどうも評判がよろしいんです。[……] たとえば戦国時代に「横目」〔横目付〕というのがあったでしょ。これはたいへんな知恵なんですね。つまり、横目は実戦に参加しちゃいけないんです。[……] で、山の上のほうにいて、形勢を観望しているわけだ(笑)。これは実に見事な分業の精神です。[……] そうすると、チャンバラをやっている人にはみえない全体の状況がみえてくるわけです。[……] 加藤周一はいかなる問題でもある程度以上の実践的な問題にはコミットしないわけです。ぼくもそうだけれども、ぼく以上にそうだね、彼は。それはもう見事といっていいぐらいコミットしない(笑)。そうすると、日本的な道徳的基準からいうと、実にずるいヤツだということになるわけですよ。」¹⁰

→この段落では、加藤にとっての自己規定である「傍観者」という立場の葛藤が表されている。本章が書かれたのは、日米ともに「政治の季節」の到来を感じさせる 1967 年末¹¹。この「傍観者」という立場を改めて問い直す必要が生じる予感が加藤にあったのでは

第 12 段落

彼は実によく働いた。国立大学で教えながら、講師として私立大学にも通い、雑誌・新聞に文芸評論を書きながら、難解な著作を翻訳するのに実に行きとどいていた。しかも広く、また正確に、内外の文芸の書を読んでいたのである。それだけのことをひとりでするには、昼夜を措かず、活動していなければならない。その必要はおそらく彼自身の側にもあったろうが、また他人の依頼を拒絶し難い性格にもとづくところも多かったのであろう。彼は大いに他人のために働いた。彼自身のために働く時が来ないうちに

⁹ 加藤周一「高みの見物について」(『雑種文化』講談社文庫、1974 年、初出『文学』1954 年 5 月号) 19～20 頁。

¹⁰ 丸山眞男『加藤周一著作集』をめぐって——W 氏との対談(東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集 第三巻』岩波書店、2015 年) 266～267 頁。

¹¹ 拙稿「70 年安保とベ平連——『週刊アンボ』を中心に」(『立命館平和研究』21 号、2020 年 3 月)。

死んでもらいたくなかった。私はいつも、文章をつくり感想を述べるときに、彼が読んでそこから抜きだせるものを抜きだしてくれるだろうことを予期していた。誰が誤解しても、少くとも一人の読者は決して誤解しないだろうことを確信していた。たとえば、私がゴットフリート・ベンを紹介し、その知的劇のわれわれにとっての意味を説いたとき、その一年後には、彼の「二重生活（ドッペルレーベン）」の周到な訳があらわれた。その訳業がどれほどの準備と労力を必要としたか。そういう男のいなくなるということが、私にとってもどれほど多くを意味したか。（205 頁、改 233～234 頁）

(1) 「他人の依頼を拒絶し難い性格にもとづくところが多かったのであろう。彼は大きい他人のために働いた。彼自身のために働く時が来ないうちに死んでもらいたくなかった。」

→本章では何度も原田の加藤ら友人たちに対するきめ細やかな心遣いや奉仕が強調される。その態度は病床においても変わらなかった（第 4 段落）

→中村真一郎

「しかし、そうした人々の悲しみを見るにつけ、私は原田があんなに広い人々に哀悼の念を起こさせているのは、生前の彼が時間の多くを他人のためにばかり使った結果ではないのかと、次第に怒りが生じてくるのをとどめられなくなった。彼にはもっとエゴイスチックに、彼本来の仕事に没頭してほしかった。私たちの世話などしてくれなくてもよかったのである。」¹²

→長谷川泉

「頼まれればいやとは言わないで、いろいろな仕事をした。実力があり、かつ人格もよく、そして奉仕精神に富んでいるから、必要以上にジャーナリズムに動かされ過ぎたところもあったようだ。」¹³

→かかる性格は、家族と愛する女性とのあいだで板挟みの状態に陥った原田の「しかし東京に残して来た家族を捨てるつもりはなかった（何故そのつもりがなかったかは、私にはわからない。しかしおそらく彼の強い「責任感」が、主な動機ではなかったろうか）」という態度とも関連しているかもしれない

(2) 「私はいつも、文章をつくり感想を述べるときに、彼が読んでそこから抜きだせるものを抜きだしてくれるだろうことを予期していた。誰が誤解しても、少くとも一人の読者は決して誤解しないだろうことを確信していた。」

→加藤にとって、共通点も多い原田は自身の仕事の真意がどこにあるかを正確に理解してくれる、かけがえのない「畏友」というべき存在だった。「そういう男のいなくなるということが、私にとってもどれほど多くを意味したか」

(3) 「たとえば、私がゴットフリート・ベンを紹介し、その知的劇のわれわれにとっての意味を説いたとき、その一年後には、彼の「二重生活（ドッペルレーベン）」の周到な訳があらわれた」

→ゴットフリート・ベン（1886～1956 年）…ドイツの詩人・医師。表現主義から出発し第 1 詩集『死体置場（Morgue）』（1912 年）でデビューし注目を集める。当初はナチスの登場を歓迎したが、やがて誤りに気づき筆を折るも、第二次大戦中は「貴族的形式の亡命」と称してドイツ国防軍に軍医として身を投じた。そのため、戦後は激しく批判されるが、復活し旺盛な執筆活動を展開。その作品は、「醜

¹² 中村真一郎「自伝抄 わが点鬼簿＜9＞ 異色の人、原田義人」（『読売新聞』1981 年 5 月 23 日付夕刊）5 面。

¹³ 長谷川泉「編集デスク 2 原田義人の死」（『看護教育』1 巻 2 号、1960 年 12 月）25 頁。

悪な現実と合理主義的機能主義的文明に対する嫌悪を歌う一方、神話的原初的な世界への自己陶酔的な没入を歌う」¹⁴

→加藤周一「ゴットフリート・ベンと現代ドイツの「精神」」(『世界』1957 年 7 月号)

…ベンの自伝『二重生活 (Doppelleben)』(第 1 部 1934 年、第 2 部 1950 年) などを通じて、ナチスに協力したドイツ国民一般の戦前と戦後で変わらぬ「精神」の一形態を明らかにする

…しかし、加藤の本意は、あくまでも 日本の文学者における「ファシズム」を支え、戦争協力を可能にした考え方¹⁵の解明にあった。「ベンに小林〔秀雄〕を、ドイツに日本を、重ねて読んでいただければ、幸である」¹⁶。この主題は「戦争と知識人」(1959 年) へと発展¹⁷

…「藝術の絶対化、歴史の拒否——この二つの基本的な態度に関する限り、ベンの思想は三三年当時から最近の死に到るまで、何ら変わることがなかった。要するにナチ政権を通じて問題の対立を止揚する希望が幻滅に終り、その後にはいよいよ鋭く、全貌的に、問題の対立だけが残ったということであろう。」¹⁸

→原田義人訳『二重生活』(紀伊國屋書店、1958 年 9 月) …解説として上記の加藤論文を再録

(4) 加藤の論文と原田の翻訳書の関係

→加藤「追記」(前掲『加藤周一著作集 2』)

「私の文章への反応は、もう一人の友人、原田義人から来た。原田は忽ち私の文章の目的が何処にあるかを見抜いたばかりでなく、『二重生活』を翻訳するかもしれないといい、そういったことを実行した。『二重生活』の翻訳は容易でない。私はきっかけを作り、原田は仕事のもっとも困難な部分を見事にやりとげて、私たちはベンの世界を日本の読者の手のとどくところに置くことができた。」¹⁹

→原田「あとがき」(前掲『二重生活』)

「この解説はかつて雑誌「世界」に発表されたものであるが、加藤の意図としては、本書の翻訳とこの論文とは同時に構想されたもののようである。従って本訳書は便宜的にこの解説を収録したものではない。両者は分ち難く結びついている。訳者は、多忙のために翻訳を行なうことのできない加藤

¹⁴ 山本尤「ベン」(『日本大百科全書』)。

¹⁵ 加藤周一「ゴットフリート・ベンと現代ドイツの「精神」」追記(『加藤周一著作集 2 現代ヨーロッパ思想註釈』平凡社、1979 年) 224 頁。

¹⁶ 加藤周一「ゴットフリート・ベンと現代ドイツの「精神」」追記(『現代ヨーロッパの精神』岩波同時代ライブラリー、1992 年) 164 頁。

加藤のベン＝小林批判という含意は、同時代の読者にもある程度、共有されていたようだ。次の橋川文三の書評はそれを示唆する。「第二の点は、ベンがぼくらにとって何を意味するかということである。結論だけをいえば、ベンはぼくらによって超えられねばなるまい。あたかも、一般に「美」が越えられるべきすべてであるという意味において。その意味では、ぼくら自身がとおって来た戦中・戦後のベンの没歴史主義——「美」をよりどころとする「運命陶酔」(小林秀雄のいわゆる「宿命」)の構造そのものが、ぼくら自身の手でより明かに解析されることが必要であろう。それは、いうまでもなく、現代ファシズムの問題として、ぼくらとベンその人とを内在的に結びつける作業となるであろう」(橋川文三「自我解体の試み——西独詩人の自伝が意味するもの ゴットフリート・ベン著『二重生活』原田義人訳 須藤健一『橋川文三の政治思想——三島由紀夫・丸山眞男・柳田国男との思想的交錯』慶應義塾大学出版会、2024 年、初出『日本読書新聞』1958 年 10 月 13 日付、332 頁)。

¹⁷ 鷲巣前掲『増補改訂 加藤周一を読む』108～112 頁。

¹⁸ 加藤前掲「ゴットフリート・ベンと現代ドイツの「精神」」219 頁。

¹⁹ 同前、追記(著作集)、224 頁。

の依頼を受けて、この仕事をともかくも果した。加藤としてはこれに不満も多かろうと思われる。この種の難解な文章はかなり大胆な言葉の置き換えや刈り込みによって核心的思想を際立たせるように翻訳すべきである、というのが加藤の意見である。訳者はしばしばそのような忠告を受けたが、まだまだ不徹底であろう。「忠実な訳」という迷信を訳者は克服できなかったからである。」²⁰

→加藤と原田のあいだには、上記の経緯を巡って認識にズレがあるように思われる。あるいは、原田の「あとがき」は、原田の控えめな性格を反映か

第 13 段落

私はまた病室に彼を訪ねた後、見舞いに来合せた旧友の一人と、旧知の婦人と共に、三人で自動車に乗ったことがある。「助かる可能性があるのかね?」「ないね」とそのとき私は応えた。「どの位もつだろうか。後のことも考えておかなければならない」と友人はいった。「わからないが、一ヵ月以上ではないだろう」。私はそういいながら、どうしても「後のこと」を話す気になれなかった。長い年月の間会わなかったその婦人は、少しも変ってはず、友人の話に、言葉少く応じていた。黙ってそれを聞きながら、私はその短いうけ答えのなかに、一人の男がわれわれの間から消え去ろうとしていることの、かけ換えのなさ、とり返しのつかなさに対するどうしようもない感慨があふれていると思った。彼女はもっと若かったときの彼を、すべての可能性が眼のまえにひらけていて、そのどれにも熱情を注ぐことができた頃の彼を、ある仲間のなかで、識っていたのである。彼女の眼は涙を浮かべてはいなかったが、追憶のために——と私は思った——美しく光っていた。(205～206 頁、改 234 頁)

(1)「彼女はもっと若かったときの彼を、すべての可能性が眼のまえにひらけていて、そのどれにも熱情を注ぐことができた頃の彼を、ある仲間のなかで、識っていた」

→この久しぶりに会った「旧知の婦人」は、1940 年代のマチネ・ポエティックからの知り合いか

→「私はその短いうけ答えのなかに、一人の男がわれわれの間から消え去ろうとしていることの、かけ換えのなさ、とり返しのつかなさに対するどうしようもない感慨があふれていると思った」

第 14 段落

欧洲から帰った彼は、その心を妻君と子供たちに向けようとしてあらゆる努力をしたにちがいない。しかし愛憎の向うところは、別にあったのであろう。相手が遠ざかれば遠ざかるほど、彼の心中の劇は、彼ひとりだけのものとなり、ただひとりの苦しみに意味を見出すことは、いよいよ困難になるばかりであったろう。「どういう犠牲を払っても、生きていることはよいことだと君は思うか、どんな状況のもとでも?」と彼は私にいったことがある、「いや、ぼくのことではない、一般的な問題としてだ」。しかしもちろん、それが一般的な問題ではなかろうということを、私は知っていた。しかし答を見出すことはできなかった。(206 頁、改 234～235 頁)

(1)「どういう犠牲を払っても、生きていることはよいことだと君は思うか、どんな状況のもとでも?」

→この意味深長な発言は、第 5 段落の病に倒れる前に原田が加藤に発した「ぼくのような人間でも、死にたいと思えば、死ぬ権利だけはあろう、他のことには権利がないとしても」(201 頁、改 229 頁)と対応するだろう⇒「すべての可能性が眼のまえにひらけていて、そのどれにも熱情を注ぐこと

²⁰ ゴットフリート・ベン著、原田義人訳『二重生活』紀伊國屋書店、1958 年) 237 頁。

ができた頃の彼」

→生前の原田が自ら死を望むようになったと思われる背景には、妻子がありながら欧州で出会ったひとりの女性を深く愛するようになった原田の「自身は、東京の家族の面倒をみる。彼女はひとりで暮す」という選択によって生じた苦悩が関係していたと加藤は推測

(2) 一方で、原田の自ら死を望むという境地を加藤は理解できなかったと考えられる

→「加藤には豊かな知的好奇心があり、「世界を理解したい」という溢れんばかりの欲求は、死への欲求が入りこむ余地さえ与えなかった」²¹

第 15 段落

私は彼を理解してはいなかったし、おそらく今でも理解していないのかもしれない。私に理解することができたのは、ただ彼と私との間にあったつながりだけだろうと思う。そのことは彼の死後、私にとっていよいよ明かになった。一個の石がそこにあるように、たしかに、一個のつながりがそこにあった。人生はそれ以外の何であり得るのか。彼の知らなかった国で、私は今この文章を書いている。私の小さな部屋は、明るく暖かく、静かで、机上には彼の書いた本が置いてある。窓の外には蕭条たる秋と、灰色の空がある。突然扉を叩いて彼が入って来ることはないだろうか。「やあ、しばらく、すっかり落ちついたようだね」。しかし彼が入って来ることはありえないし、彼にはもう一度会うことは決してできない。そういう考えは、私に地団駄を踏ませる。私は話をしたいとは思わない。ただもう一度あの長い髪と青白い顔を見たい。それさえできないということ、彼に電話をかけることさえできないというほど馬鹿げたことが、一体あり得るだろうか。しかしどんな馬鹿げたこともあり得るし、あり得るばかりでなく事実になった、とりかえしがつかず、測り難く、全く理解し難い事実。 (206～207 頁、改 235～236 頁)

(1) 「私は彼を理解してはいなかったし、おそらく今でも理解していないのかもしれない。」

→第 2 段落の「死んだ男——私は彼をほんとうに識っていたのだろうか」(198 頁、改 225 頁) という疑問に対する解答

→上記のような原田の抱えていた葛藤や苦悩、生の断念を、原田が生きていた時、加藤は理解していなかった。「私に理解することができたのは、ただ彼と私との間にあったつながりだけだろう」

(2) 「しかし彼が入って来ることはありえないし、彼にはもう一度会うことは決してできない。そういう考えは、私に地団駄を踏ませる。」「しかしどんな馬鹿げたこともあり得るし、あり得るばかりでなく事実になった、とりかえしがつかず、測り難く、全く理解し難い事実。」

→「死」の不条理に対する加藤の痛切な思いが吐露されている。『羊の歌』ではしばしば言及される

第 16 段落

彼の死後、しばらくして私は再び東京を離れた。その夏、「安保反対」に起ちあがった大衆はたしかに私を鼓舞した。しかし彼の死は、私のなかで何ものかを変えていた。私はそのときまで、どこに暮し、どこで仕事をするかということに、強く拘っていたが、そのときから、そういうことは二次的な条件にすぎ

²¹ 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』462 頁。

ず、どこにいても、できることはできだろうと、考えるようになった。新しい職が太平洋の彼岸にあり、私はその仕事を引きうけて、単身羽田から出発した。旅客機の窓から東京の街の灯が忽ち遠ざかり、やがて夜の海の深い闇のなかに消えて行くのを見つめながら、私にはどういう感傷も、心残りもなかった…。(207～208 頁、改 236 頁)

(1)「彼の死後、しばらくして私は再び東京を離れた。」「新しい職が太平洋の彼岸にあり、私はその仕事を引きうけて、単身羽田から出発した。」

→加藤は 1960 年 10 月 5 日午後 6 時 15 分羽田発の便でカナダ・ヴァンクーヴァーへと飛び立った²²

→ブリティッシュ・コロンビア大学に准教授として赴任し、1969 年までアジア学科などで教鞭を執る。

前任者の「ドーアの推薦を受けて、アジア研究部門の拡充を図っていたブリティッシュ・コロンビア大学は、加藤の招聘に動いたのだろう」²³

→「1963 年 9 月 19 日に作成された〔本村〕久子宛の書簡には、加藤が日本文学や美術批評に関する授業を 3 つ受け持っているとの記述や、「そこで今度こそ日本文学史序説（英語）を何とかまとめるつもりでいます」という記述がある」²⁴

(2)「しかし彼の死は、私のなかで何ものかを変えていた。私はそのときまで、どこに暮し、どこで仕事をするかということに、強く拘っていたが、そのときから、そういうことは二次的な条件にすぎず、どこにいても、できることはできだろうと、考えるようになった」

→第 7 段落で記されているように、加藤はこれまでの自身の歩みが「曲り角」にさしかかっていることを自覚する。「多くのもの事の中に一種の関連がみえはじめ、そのことが自分自身の立場の自覚とつながり、何処にいても従って何をしていても、自分が自分自身であることに変りがないと思うようになりはじめていた」(改 230 頁)

→自身と「同じ道」を歩んで来たであろう原田の道半ばでの死に、加藤は人生の「曲り角」の自覚を深めたにちがいない。と同時に、加藤は自己にとって本質的な「仕事」に着手する必要性を痛感しただろう

→これまで関心を向けてきた様々な事象には実は「関連」があった。それは加藤にとって、現在の日本社会とも連続する、日本の文化・思想の歴史の全体に関わる追究すべき問題の焦点が定まってきたことを意味するだろう。問題意識の焦点が定まるならば、研究環境さえ整っていればどこでもそれを追究することはできる。「私にはどういう感傷も、心残りもなかった」

²² 「加藤周一氏カナダへ」(『読売新聞』1960 年 10 月 6 日付) 11 面。

²³ 鷲巣前掲『増補改訂 加藤周一を読む』126～127 頁。

²⁴ 資料番号 L3205。落合優翼＋福井優＋蛭子良風＋堀内智吉＋齋藤由紀「加藤周一文庫所蔵書簡資料の紹介」(『加藤周一現代思想研究センター報告』2 号、2025 年 3 月) 230 頁。